

私と君は違うから

横須賀市立大楠中学校三年 吉田陽向

目が見えないから喋れないから、だってみんなと違うから私と違うし、可哀想。私のお姉ちゃんは障害があり、体が不自由でした。お姉ちゃんのことを話すといつも言われることは可哀想というこの言葉でした。でも私はお姉ちゃんのことを可哀想と思っていなくて、むしろ強くてカッコいいと思っています。なのでいつもそう言われると少しいやな気持ちになり、「可哀想なんかじゃない。」と言いつつ返していたのを覚えています。でも今思うと人はそう思うことが普通なんだなと思います。でも私は自分だけの価値観や考え方でそんな言葉一つにまとめないでほしいと、そう思いました。日本人は勇気がないんです。見ているだけで行動しようとしません。お姉ちゃんとお母さんが階段を上る時のことです。お姉ちゃんは車椅子でした。上るのにはお母さん一人じゃとても大変です。スロープもないんです。通る人たちは困っていることを分かっているのに、知っているのに知らないふりをして通り過ぎていくんです。でもある人が声をかけてくれたんです。その人は外国人でした。お母さんに「大丈夫？手伝うよ。」とお姉ちゃんにも笑顔で「こんにちは。」と優しく話しかけてくれたそうです。その人は階段を上るのを手伝ってくれました。初めてお姉ちゃんに会った人はいつもどういった態度をすればいいのかとびっくりした姿をみせていました。

でも、私たち家族は笑顔で優しくお姉ちゃんに話しかけてくれるだけでお姉ちゃんもきつと嬉しいと分かるから私たちも嬉しいんです。ただ普通に接してほしいだけなんです。言葉が話せないだけでなにか問題はありますか。障害者と健常者の何が違いますか。心は一人一人同じようにあるんです。話せないだけで、ずっとお姉ちゃんは私の話しをいつも聞いてくれました。顔の表情で分かるんです。いつもずっと一緒にいたから。日本は障害者に優しい国ではないです。だって考えてみてください。自動販売機は車椅子の人が手の届く大きさに設計されていますか。どこにでもスロープがありますか。困っている人を見かけたら助けてあげることではできませんか。日本は世界で人を助けるということに関して最下位の国です。日本はなぜこんなにも冷たいのでしょうか。可哀想じゃなくて、それを個性と考える考え方はないのでしょうか。私にだって苦手なことやできないものがあります。歩けないから歩くことを手伝ってもらおうのと、勉強が苦手です。分からないから、分かるように勉強を手伝ってもらおうとって一緒にやらないですか。それぞれ得意なこと、苦手なことがあるから助け合うんです。障害があっても、その人にはそれが普通のことなんです。その人にとってそれが普通のことだから可哀想というこの言葉はその人を否定しているようなものなんです。そのような同情心はいりません。いろいろな色や形、その人にしかない特別な個性を受け入れてください。きっとそれができた時に分かるんです。みんなちがってみんないいという言葉がどのような言葉なのか、どのような意味なのか。とてもシンプルな言葉で誰もが知っているこの言葉の深さが分かります。私と君は違うからよりいいんだ。あたりまえなんだ。特別なんだと忘れないでください。

私だからできること

横須賀市立浦賀中学校三年 宮野 愛 梨

少子高齢化といわれる世の中で、中学生の私たちにできることはあるのだろうか。

私は、夏休みに祖父母の家に行った。私の祖父母は八十三歳で高齢者の中でも後期高齢者という分類になる。一年ぶりに会った祖父母は見た目はあまり変わっていなかったが、ひざやこしの痛み、年相応ではあるが、軽い認知症のようになっていた。同じことを何度も聞いてきたり、五分前に覚えたことをすぐに忘れていた。そんなことはしよっちゅうだったが、年を取る上ではあたり前のことなので特に悲しいとかそんな感情はなかった。家族も笑いながら対応したり、歩くときの補助も楽しむことを心がけている。しかし、介護をする上で介護者、要介護者ともに、問題が起こってしまうというのはさげられない。特に、高齢者が高齢者を介護しなければならぬという問題が深刻化している。高齢者が高齢者を介護することを老老介護といい、認知症の方が認知症の方を介護することを認認介護という。夫婦同士や兄弟同士などが老老介護・認認介護をするケースが多い。老老介護の問題点は、高齢になるほど介護者も体を動かさにくくなり、肉体的な負担が増えていくという点がある。さらに、長く続く介護により精神的な負担もあり、そのストレスを要介護者にぶつけてしまい、最悪の場合は虐待につながってしまうこともあるという。私は、このような問題点を知り、要介護者の介護をよりよくするためにも、介護者の方々のケアをしていく必要があると思った。第三者の助けがないと共倒れをしてしまう可能性もあるという。では、私たちにできることはあるのだろうか。私が一番大切だと思うのは、介護者が一人で抱えこまずに誰かに相談することだと思う。精神的に落ちている時は、冷静に物事を考えられない。

そんなときに、誰かとささいな話でもいいから、会話をすることでその方が救われることもあると思う。私にできることを考えてみた。一つは、近所にいる高齢者の方々のサポートをすること。私の家の周りにも夫婦2人で住んでいる高齢者の方々が多くいる。まだ老老介護や認認介護をしている方はいないが、今後そのような方がでてくるかもしれない。その時は、介護者の方も、要介護者の方も関わりを持ってサポートをしていけたらいいと思う。地域の高齢者の方々と関わりを持つという点で、夏休みの間にボランティアに参加した。そのボランティアはスマートフォンを使う上でわからないところを中学生が教えるという内容で、地域の高齢者の方々が十人ほど集まっていた。私は人見知りなところがあり、最初は緊張からあまりしゃべれなかったが、やさしく気さくに話しかけてくださったことで緊張がほぐれて楽しんで終わることができた。このような経験を通して、近所の高齢者との関わりは自分にとっても価値のあるものとなった。今回のように高齢者の方と会話をすることで、老老介護や認認介護をする介護者の方々が救われるといいなと思う。老老介護・認認介護の介護者に私ができることの二つ目は、祖父母のサポートをすること。私の祖父母はすぐに行けない遠い所におり、近くに伯母が住んではいるものの、ずっと一緒にいることはできない。祖母はまだ軽い認知症が進行しており、祖父はこしやひざの痛みが激しくなって立ち上がるのもとても大変そうだった。そんな状況でも、祖父が祖母の薬を朝昼晩と用意している姿を見て助け合いながら互いに介護をするのも今まで長い間一緒にいたからこそできることもあるんだなと思った。そんな祖父母の近くに行くといいなと思う。

老老介護・認認介護などの介護や高齢者の問題を知って、将来誰にでも起こりうることだから今の私たちが高齢者にできることをしていくことで、高齢者が過ごしやすい世の中になると思った。私だからできるという気持ちを持って、行動に移していきたい。

## 言葉と行動でできること

横須賀市立浦賀中学校三年 末吉紗帆

自分の思いを言葉にすること。それは、とても難しい。そして、とても大事なことだと思ふ。言葉で私達は自分自身を守ること、誰かを助けることができる。一方で、言葉で人を傷つけることもできてしまう。

中学一年生の秋。私のくつに針がぬいつけられていたことが始まりだった。いつもと変わらない一日を終えて部活に行こうとしたとき、それを見つけた。本来、その時そのまま先生を呼ぶべきだったのだろうと今では思う。しかし、私は自分に起きたことを理解できず、自分の落とし物かもと呑気なことを考えていた。だから、その針をぬいて自分の教室に戻り、裁縫箱の中身を確認した。でもすべてそろっている。先生を呼んだのはそのあとだった。不思議なことに自分は誰かに悪意をもってやられたなんて考えてもいなかった。

翌々日。今度は別の人の上ばきに入っていたとクラスで騒ぎになっていた。その時初めて私の中で恐怖のようなものを感じた。同じ部活の子が被害にあった。そうすると、「同じ部活の奴がやられてるのなら、犯人は部内の奴だろう。」こんな噂と憶測が瞬く間に広がった。そうして名前があがってしまうのは私と仲の良かった子達。噂に腹が立つのと同時に、否定しきれない、どこか疑ってしまっている自分もいた。それでも、絶対にそうじゃないと皆には言いきっていた。何も分からないまま、時間は過ぎていく。やがて、クラスメイトたちも日常へと戻っていた。私だけどこかに取り残されたような気分だった。冬休み明け。事態は急変した。クラスの数名のグループがあからさまに私を避けるようになっていた。私がいると、大きく、わざとらしく方向転換をして通っていく、無視と睨みも毎日続いた。無視や睨みだけならまだ良い。周りに人がいる時や、それぞれ一人ずつだったら私に普通に愛想よく話かけてくるのだ。私がひとりでいると、トイレでわざと悪口を聞こえるように言ってきたり、ロッカー前で足を踏みつけたりしてきた。

自分が傷ついていることに気がつくくと、こんなにも苦しくなると、所かまわず泣きたくなるんだと私は初めて知った。どうして私がこんな目に遭わなきゃ

いけないんだと家で涙が溢れてきた。そして、悔しかった。相手を目の前にすると恐怖で何もできなかったことが。結局、私の心をめちやくちやにされていたことがとにかく悔しかった。

一度、先生方の指導があつたグループに入ることがあつた。私に対しての行動をひとつずつ確認したらしい。しかし彼女たちは、「そんなつもりはなかった。」先生はその言葉を信じてしまったのかそれ以上何も追求することはなかった。

それから彼女達の行動は変わらず、続いた。学級解散へのカウントダウンが日々刻まれていた。そうすると、「あと何日だから我慢すれば終わる。」

「あと何日だからもう大丈夫だよ。」そういった言葉がかけられるようになっていた。たとえ心配してかけてくれた言葉だったとしても、私にとつてはとても過酷な言葉だった。学校生活が息をつまるほど長くて辛いもので一日を終えているのに何回も繰り返さなければならぬのか。どうして私が我慢すれば良いのか。あのグループは、どうして楽しそうにずっと笑っているのか。あと何日という言葉は苦しかった。

そのまま彼女達と何も解決できずに、結局何も分からないまま学年が上がった。当時私は、自分が情けなくて仕方なかった。ただ、時が過ぎることを待っていて、彼女達に堂々と打ちかえなかつたことが情けなかつた。周りの人達に情けない姿をさらしたくなくて黙っていた。それでも私は「誰かに分かってくほしい。」と助けを求めている。

いじめはこの世界からどうしても無くならないものだと思う。ひとりひとりが自分が加害者になつてしまわないように気をつけていたとしても、自分が相手を傷つけることは絶対ないという保障もない。その一言で、その行動で誰かを傷つけてしまうことはある。

しかし、その一言で、その行動で誰かを救うこともできる。

「私は味方だよ。」

私はこの一言に救われた。休み時間には一緒にいてくれる。この行動に私は救われた。

人は誰一人として、同じ人はいないし、意見が合わない人もいる。それでも、自ら相手を傷つける選択はしないほしい。心の傷はどんな怪我よりも痛み、深く残る。

だから、自分の言葉や行動を考え、責任を持てるような人になりたいと強く思う。

過去の私の経験から学んだこと

横須賀学院中学校三年 小山 侑奈

私は、小学生のころ2回いじめの現場を経験しました。いじめは本当に人を簡単に傷つけることができる最悪なことだと身を持って実感しました。一回目は、私自身がいじめというかちよつとしたいやがらせにあったことです。それは小学一年生の時、私のクラスで起こった事件が原因でした。その事件が結構な大ごとになり、救急車も来ていて大騒ぎでした。担任の先生は、「このことをあまり他のクラスの子に言っちゃいけません。」と言っていました。下校時、他のクラスの友達に「何があったの？」と聞かれ、これは私が悪いのですが、その子に事件のことを話してしまいました。それを聞いていた同じクラスの子達が「なんで言ってるの。」と大声で言って、それに合わせて小一の同じクラスの子達や他のクラスの子達も私たちの周りに集ってしまいました。その日は一年生だけ早く帰っていたので、周りにいたのが一年生だけで良かったのですが、たくさんの人たちに視線を向けられ、私はその場から逃げ出してしまいました。その後を追いかけてきていた子達が、「先生が言っちゃダメって言ってたのに言うなんてひどい。」「その子がかわいそう。」と言われてしまい、しまいには、暴言やランドセルをたたかれたり、けられたりしながら、家に帰ってしまいました。そのちよつとしたいやがらせは、3日程で終わりましたが、まだ幼かった私にはつらい経験でした。先生に言われたことを守らなかった私が一番いけないのかもしれませんが、いやがらせをされたのは悲しかったんです。人を侮辱するような言葉や、暴力は簡単に相手を傷つけてしまう行為です。どんな状況であれ、いやがらせをしたりいじめていい理由には、ならないと思います。私はすごく傷つきもしましたが、仲良かった友達にもいやがらせを受けショックでした。私は、知らない内に相手を傷つけないように心に決めた出来事だったと思います。

二回目は、小学5年生の始め頃に起きたことです。ある日近所の友達と帰っている時、その友達が男子と後ろを歩いている同じクラスの子をチラチラ見ながら楽しそうに話していました。気になった私は「どうした

の？」と聞くと、「別になんでもないよ。」と言われてしまいました。私は、「そっか。」と言ってしまう、そこからあまりそのことを気にしていませんでした。この時になんでもっと疑問に思わなかったのか本当に当時の私の考えが理解できません。今思い返せば、あやしい行動はたくさんありました。前に後ろを歩いていた同じクラスのAちゃんのことを移動教室の帰りみんなさげているような気がして、「一緒に帰ろう。」と声をかけようと思ったら友達に、「侑奈ちゃん早く帰るよ。」と手を引つ張られたり、給食の時間、大おかずをいれている前半の子が終わって、後半の子に変わった時、一緒に並んでた子達が、「手洗いにいこう。」と言っているのが聞こえて、十人程並んでたはずなのに気がついたら、前に並んでた男の子と私だけになっていました。その後半の子がAちゃんでした。さすがに、この時の私もおかしいなと思いつつ、私の気のせいなのかなとも思い先生に相談できずにおかしいなと思いつつ、今の友達がいじめをするはずがないと私が勝手に思い込んでいたのもあるかもしれませんが、ですが、この数日後いじめだったということを確証した出来事がありました。私と同じようにおかしいなと思った子が先生に相談していたんです。お昼休み終了後、先生が険しい顔で教室にはいつて来ました。そしてその相談された内容について話をしはじめ、これは本当なのかと先生が聞くと、うなづく子がちらほらいました。そして先生が一人一人に質問して、その結果がクラスの半分以上がAちゃんをいじめていたことが分かりました。そこから二時間ぐらいい話し合いがおこなわれ、その話し合いの中の先生の言葉が今も頭の中に残っています。その言葉が、「道徳の授業では、素敵な言葉だらけなのに、いじめやそれを見てもぬふりをするのはなぜですか？あの言葉は全てうそですか？」とおっしゃっていました。本当にその通りだと思えました。これは私自身にもあてはまっています。言うことはできるのにそれを行動に移すことはできなかった、自分の未熟さを感じました。そんなこと私の友達やクラスメイトの子がするはずがないかと思わず、注意したりする行動をします。同じことを起こさないためにも、この先生の言葉を忘れず誰かが知らない内に傷つけないよう私自身努力します。

いじめやいやがらせはよくないことです。私もいじめに加担したり、見てみぬふりをしたり人が傷つくことはほしくないよう心がけます。そして人によりそうことや友達がまちがったことを注意することもいじめをなくす第一歩だと思うのでこういうことも広めていけたらいいなとこのような経験をしてみました。